とある魔術の禁書目録前史　とある学園都市の見えざる神の手（ゴッドハンド）

池宮樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術の禁書目録前史　とある学園都市の見えざる神の手（ゴッドハンド）

【Ｎコード】
Ｎ７９９７Ｓ

【作者名】
池宮樹

【あらすじ】
それは上条当麻たちが学園都市にやってくる少し前の話。
このお話はとある学校に通う平凡極まりなく見える少年
鈴木（すずき）　太郎（たろう）ととある破天荒な少女が
繰り広げる日常と非日常の話である。

原作でも人気がある、とある彼女の高校時代という設定で
学園都市の過去や成り立ちを書いてみました。
初めてですので下手で、遅いと思いますが楽しんでいただけたら幸

いです。

プロローグ

二十世紀末。
世界史的に見て非常にイレギュラーな街が日本に誕生した。
首都、東京西部の未開拓地に作られた、
東京都の三分の一を有し巨大な壁に囲まれた街、『学園都市』
最先端の科学の追求の為、そして優秀な学生の教育の場としての自治都市・・・。
そしてその主な研究対象は、『脳の開発による『超能力』の開発と研究』という
怪しいにもほどがあるものであった。
日本中、いや世界中の人々が嘲笑していたこの『非』国家プロジェクトは、
ある事件をきっかけにわずか数年、まるで瞬きをする間にその形を整えてしまった。

その『器』も、その『中身』も。

その『中身』を集めるきっかけとなったある有名なエピソードが存在する。
全世界に同時放映されたそれは、世界の人々に人間の新たな可能性を示したことで
歴史的大事件だといえるだろう。

『空飛ぶ列車事件』、『銀河鉄道事件』と後に呼ばれるそれは
ＴＶカメラ数万台と何十万人という衆人環視のもと、一人の子供の超能力によって、
ＳＬの蒸気機関車が空を飛ぶという
学園都市による、まるでお伽話の世界のような荒唐無稽なデモンス

トレーションであった。

これが学園都市が開かれて以来、全国いや世界各地でプロモーションに使われ続ける
学園都市を代表するエピソードであり、
夢の力を求めて学園都市に世界中から物と人が集まるきっかけとなった
学園都市で一番有名なお話である。

第一章　平凡と平和を求めてやまない平凡な名前の少年とそれを許さない女

読んでいただいてありがとうございます。頑張ります。

第一章　平凡と平和を求めてやまない平凡な名前の少年とそれを許さない女

1

とある学校の屋上。
今日は初夏の日差しが気持ちのいい日だと、
お気に入りの陽だまりポイントに少年は寝そべっていた。
「あ～～～～～今日はいい天気だな～～～～～。こんな日は、静かに、日向で、干からびるまで、昼寝をしたい、って愛穂ちゃんいきなりなにすんのさ！」
一瞬前まで自分の頭のあったところを蹂躙したすらりとしたおみ足に戦慄しながら、
少年はその犯人ーーー黄泉川愛穂に正当な抗議をした。
整った顔立ちにすらりとした長身、無造作に後ろで束ねた長い髪、
そして高校生としては規格外である爆乳をもつ黄泉川愛穂は、その真っ当極まった抗議に対して

「うるさい」の一言で瞬殺。

さらに
「太郎、今日私は風紀委員（ジャッジメント）のお仕事があるじゃん！なんであんたついてこないつもりになってるじゃん！」と彼ーーー鈴木太郎に言い放った。
内心相変わらずひどい・・・・と思いながらも顔には出さず、
顔立ち平凡、身長平均、全体的に平凡な鈴木太郎は無駄とは思いながら反論してみた。
すごく早口で。
「だってさ愛穂ちゃん、僕はそもそも風紀委員じゃないし、レベルは1の低能力者だから何かあっても役になんて立たないし、今日は

お天気いいからここでお昼寝したいし、ってまた！堪忍して！頭踏み潰さないで！」
といいながら空爆のように飛来する黄泉川の踏み付け（フットスタンプ）を太郎はゴロゴロすることによってかわす。
当然下はコンクリート、いろいろと痛い。
そんな彼に彼女は”いつも”のようにこう告げるのであった。
頭上から、指を突き出し、（巨乳の）胸を張って、大きな声で、堂々と。
ーーーー理不尽を。

「あんたは私のパシリなんだから、私の手伝いをするのは当たり前じゃん！」

今日も平凡で平和な午後とは行かないようだと、心の中で黄泉川にばれないように盛大なため息をつく太郎であった。

学園都市には警察が存在しない為、その治安を守るために二つの組織が作られた。
教師達の有志による警備員（アンチスキル）と生徒有志による風紀委員（ジャッジメント）である。
黄泉川は、第７学区にある第１７７支部所属の風紀委員であり、何らかの能力者が多い風紀委員の中で、レベル０の無能力者にも関わらず現場でのその高い能力で非常に有名である。

ーーーーただし一方で、事件解決のためには物的被害を考慮しないため『恐怖の巨乳風紀委員』、『事件を請求書に変える女』などとあだ名されている点でも有名であるのだが。

そしていつも太郎は風紀委員でもないのに、いつも彼女に振り回され現場の後片付けや、彼女の作る大量の始末書の整理、嫌いな事務

仕事をやらされているのである。

黄泉川曰く「だってパシリだからじゃん。」

「あ～今日は何事もなく平和だったじゃん！
ほんとによかったよかったじゃん・・・・・・部屋もキレイになったし。」
そういいながら太郎に淹れさせたコーヒーを飲みながらソファーに寝そべる黄泉川。

ちなみに服は制服からジャージに既に着替えている。
黄泉川はひらひらしたスカートがあまり好きではなく、
動きやすくて体が楽なジャージを学校以外では常に愛用しているのだ。

「愛穂ちゃん・・・・・掃除（現実逃避）終わったんなら、始末書かいてね。」
思わず突っ込む太郎。
彼女には現実から逃避したくなると、掃除を始める癖があるのだ。
黄泉川は思わずたじろぎながらも
「だって太郎、この事件だってあの事件だって、私が頑張ったから誰も大きな怪我も無くて済んだのは事実じゃん！
何で私ばっかり始末書の大群に襲われなきゃならないじゃんよ！」
「別に愛穂ちゃんが頑張ったことは誰も否定してないよ。
ただ、窃盗犯捕まえるのに、コンビニ一件破壊したり、痴漢を捕まえるために地下鉄の止めたりするのはやりすぎなんじゃないかな・・・・って意味だと思うから、たまには愛穂ちゃんも自分で始末書書いてよ！」
と真っ当極まるを述べる太郎君であったが、ふと背後に感じる気配

に振り向くと
「太郎・・・・あんた太郎の癖に生意気だ！制裁してやるじゃん！」
とヘッドロックをきめられた。

当然、そうなれば黄泉川の規格外の巨乳が太郎の顔に接触しないわけがなく、
「痛い、痛い、痛い。ギブ、ギブ、ギブ！」という叫び声（推定１００デシベル）よりも、
（痛いけどやわらかい、痛いけどやわらかい、痛いけどやわらかいけど、いたくてやわらかくて～～～～～～～～～）という心の声の絶叫が、彼の心のなかでさらに大音量（推定３００デシベル）であったことは当然の結果である。

そんな風にじゃれあっていると、
「黄泉川、またお前は関係の無い彼に雑用を押し付けて・・・・・・すまん、太郎君。」
第１７７支部所属の風紀委員で、先輩でありこの支部の責任者でもある
舘（たち）　唐雄（からお）が呆れ顔で入ってきた。

有無を言わさず黄泉川にゲンコツを落とす舘。
「痛った～～～！舘先輩～～～～～。
いきなり何するじゃんよ！
舘先輩だってこんな時間まで支部にこないとか
サボりだったじゃんかよぉ？」と涙目にになりながら反論する黄泉川に、
さらにもう一発ゲンコツを落としながら
まるでアメフト選手のような体型をしている舘はこう言った。
「お前と一緒にするな！今日は風紀委員全体で緊急会議があってな。
そこに参加してただけだ。」といいながら表情を曇らせる舘。

それに鋭く気づいた黄泉川が
「先輩、なにかあったじゃん？顔が大マジじゃん。」と尋ねる。
言いにくそうにする舘に、太郎が
「僕に聞かれてまずいことなら僕もう帰りますから、舘先輩。
・・・・・始末書も全部書き終わりましたし。」と申し出るが、
「いや、ここに来るまでずいぶん悩んだがやはり君にも聞いておいてもらったほうがいいだろう、太郎君。」と言い、舘は話しはじめた。

第一章　平凡と平和を求めてやまない平凡な名前の少年とそれを許さない女

オリキャラに関しては簡単な補足をしていきたいと思っています。
では

オリキャラＮＯ１
鈴木　太郎　（すずき　たろう）

主人公
とある高校の２年１組で、低能力者（レベル１）
顔立ち、身長、その他容姿のすべてが普通で特徴が無い。
成績も中の中で、可もなく不可もなく。
一年の頃からのクラスメートである黄泉川愛穂に常にパシリ扱いされ、風紀委員の仕事に引きずり回され（風紀委員ではないのに）、各種面倒ごとを押し付けられる原作主人公並みに不幸な人。

他のクラスメートには、男子は黄泉川（美人で巨乳だけど残念）の生け贄として認識されているが、やはり嫉妬の対象でもある。
女子には、可哀想、顔立ちとかは特徴無いけど恋人としてはないけど、へたれだが、性格いいし、結構かわいいし、『あの』黄泉川の横暴にも黙って耐えているところから、結婚するならいいかな～とか思われている。

はい、もちろん表設定です。裏はストーリーが進んだ段階で。

名前の由来は、バレバレとは思いますが裏設定公開のときに

オリキャラＮＯ２
舘　唐雄　（たち　からお）

太郎たちとは別の第7学区の高校の三年生で
レベル3、筋力強化（パワーポイント）
身体能力向上系能力者で、能力を使うと約3倍の怪力が出せる。
脚力なども上昇するので、高速戦闘も可能。かなりの実力者。

アメフト選手のような体格の風紀委員第177支部の責任者。
人格者で後輩の面倒見がいいが、黄泉川という爆弾が
部下のため何かと苦労が耐えない。

全体的に駒場さんをイメージしてください。
能力は発条包帯（ハードテーピング）＝筋力強化（パワーポイント）で
ほぼ間違いない感じです。ただし駒場さんと違いほぼノーリスクです。

名前の由来は、日本神話の天手力雄神　アメノタヂカラオ

ご意見ご感想お待ちしてます。特に文章のおかしな点のご指摘お待ちしております。

第一章　Chapter2（前書き）

ぐっは、なんか書き換わってる・・・・がんばってかきなおします・・・・内容と流れは変わりませんが細かいところはずいぶん変わります・・・・・涙

第一章　Chapter2

2

重々しい口調で舘が話し始める。
「そうだな、まずどこから話せばいいのか・・・。
二人とも第１８学区第５５支部の風祭のことは知ってるな？
あの『風力自在』（エアロマスター）の風祭（かざまつり）　総左（そうざ）だ。」
舘の雰囲気に飲まれていた黄泉川であったが、
予想外の話題に気を楽にして明るい声で
「あったりまえじゃん、風祭先輩はこの学園都市８０万人の中でも
２００人ほどしか
いない大能力者（レベル４）の一人で、あの超エリート校の長点上
機学園生で
全風紀委員のあこがれのひとじゃんよ！まさに風紀委員のリーダー
的存在じゃん！
あとは超イケメンだから、女の子にもモテモテらしいじゃん♪」と
いうと
太郎もそれに続いて
「え～とよく学園都市外部へのプレゼン映像とかに出演したりして
る人ですよね？
風を巻き起こしたり、一人で空を飛んだりしてましたよね・・・・
あ、去年の大覇星祭の選手宣誓をしてた人もその人ですよね、かっ
こいい人ですよね～。」と以前に見た映像を思い出しながら話す太
郎。

二人の楽しげな様子にも舘の重々しさは変わらない。
そして告げる。
「その風祭が昨日の夕刻何者かに襲われた、意識不明の重体だ。」

その一言に二人が絶句している間に舘は話を進める。
ーーー拳を握り締めながら。
「他にも第３学区第４０支部の守瀬、第５学区第７０支部の川村、第１２学区第１２０支部の日向までやられたらしい。
風祭と日向は、黄泉川が言った通り学園都市でもまだ２００人ほどしかいない
レベル４の大能力者、
川村と守瀬だってレベル３の強能力者で風紀委員の中でも実力者で知られてるっていうのに全員一方的にやられてやがる。
すべて後ろから後頭部に一発、そのままオネンネ、だとさ。
ーーー幸いまだ死人も回復不能な障害を負ったやつもいないから安心しろ、黄泉川。
風祭以外のやつはもう意識を取り戻していて、３人とも口をそろえて、
『やられたとき、回りには誰もいなかった、殴られた衝撃を感じて次に目が覚めたら病院の天井が見えてびっくりした。』っていってたらしい。
目撃者も突然倒れたって証言してるし、周辺の監視カメラも勿論調べたが、
犯人らしきものは何も写っちゃいない。」
そこまで話すと舘はようやく一息つく。
いまだショックから回復していない黄泉川はあまりのことにワナワナと震えている。

そんな黄泉川を心配そうに見つめつつ
「不幸中の幸いというべきか、一般生徒にはまだ被害は出ていない、今のところ被害は風紀委員の高位能力者だけだ。
今日は本部に各支部の責任者と一部の能力者だけ集められて事件の報告と今後の対策を協議してたわけだ。

で、そこで決まった内容が事件自体を一般の生徒たちには内密すること。、
しばらくの間、風紀委員の活動を高位能力者三名以上のチームによる巡回のみとし、それ以外の風紀委員の活動の一時的凍結ということに決まった。
普段のこっちの領分も警備員（アンチスキル）に委託する形だ。
今頃他の支部責任者の連中も俺と同じような気分でみんなに話してるだろうよ、
くそったれ。」

ようやくそこで我に返った黄泉川が叫ぶ。
「なんで？活動の凍結なんて！いざってときに仲間の仇もとれないなんて
それじゃ何の為の風紀委員じゃんよ！？
みんな今まで何のために風紀委員頑張ってきたじゃん！！
しかもその能力者のみのチームによる巡回ってどういうことじゃん！
私たちみたいな無能力者や弱い能力しかない奴らは足手まといだっていうんじゃん！？
だいたい私がその会議に呼ばれてないのはどうしてじゃん！」

黄泉川の怒りを冷静に聞きながら、内心舘は予想通りの展開に歯噛みをする思いだった。
今回の決定は最悪だといっていい。
特にいきなり最初に風祭がやられたのが致命的だったと舘は思っている。

そもそも風紀委員が誕生したのは実はこの3年ほど前の話で、
まだまだこういった非常事態を経験したことが少ない、
いや今回のこれが初めてと言っていいだろう。
組織の未成熟さをまざまざと突きつけられたのである。

さらに表立っては誰も言わないが風紀委員の中にも存在する
高位能力者優越論からくる歪んだプライドが、
自分達と同じ高位能力者がやられたその雪辱をしなければという思いとなり、
それが自分達力のあるものだけで犯人を捕まえるという発想につながり、
それには弱い能力しかない連中や無能力者が足手まといという結論に至ったのである。

その上風紀委員全員が心の中で頼りにしている実力者が二人もやられた事、
中でも学園都市内外に名前が知られるほど有名で強力な力を持つ風祭がやられたことによって、冷静な判断が下す人間がいなくなった執行部が
パニックを起こした事が今回の黄泉川の、ひいてはすべての”普通”の風紀委員達の怒りを招いていることを舘は正確に理解していた。
最悪の場合風紀委員の解散に繋がりかねない大失態である。

その胸中を隠しつつ、舘は静かに黄泉川に目を合わせ、
その目を見つめながらゆっくりと頭を下げた。
最も身近な先輩であり尊敬する舘のその行動に驚き、黄泉川が息を呑む。

「せ、先輩、やめてほしいじゃん。私は先輩を責めてるわけじゃ・・・・・。」
舘の声は腹から絞り出されるような声だった。
「すまん黄泉川、お前の言うとおりだ。
俺も事件をあらかじめ知っていれば、まだ何とかなったのかもしれんのだが

今日初めて聞いた話でどうすることもできなかった、すまん。
俺自身はそれこそ風紀委員のこの盾の紋章に誓ってお前たち仲間を足手まといだとか思ったことは一度も無い、絶対にだ。
しかし、今回のように自分達が標的にされた事件なんかが起こると、こういう事が起こることはある程度しかたないとも言える、俺達風紀委員はまだまだ新しい組織だからな。
だから今回だけはこらえてくれないか、頼む黄泉川。」

その舘の態度に怒りを持続できなくなった黄泉川が
「わかったじゃんよ・・・お願いだから頭をあげてほしいじゃん。でもせめて先輩、今分かってることだけでも教えてほしい。じゃなきゃとても引き下がったりできないじゃん。」
と小さな声で告げ、事件の詳細の説明を求める黄泉川に
舘は苦笑しながら
「詳細っていってもほとんどなにも分かっちゃいない。
高位能力者が４人、同じ手口で後頭部を殴打されたこと。
その時何も見ていないこと、目撃者も何も見ていないこと、そして監視カメラにすら何も写ってないこと。事実としてはそれぐらいだな。
あとは現場のひとつを帰りに明日真に『遺留思考』（サイコメトリー）で調べてもらったが、何も読み取れなかった。」というと突然大事なことを思い出したように黄泉川が叫ぶ。
「そ、そういえば今日明日真のやつみてないじゃん！あいつ今日は非番だったから忘れてたじゃんよ！」と焦ると
「あんだけ慕われてるのに、明日真もかわいそうに。」と舘に茶化される黄泉川。
うぅっといじける黄泉川だったがあいつの慕い方は”百合”だからこわいと黄泉川が返す。

そこで黄泉川がふとつぶやく。

「誰にも気づかれず誰にも見つからない、いや見えない。
まるで”あの”『不視神手』（ゴッドハンド）の仕業みたいじゃんね。」と。

その一言に今まで話を微動だにせずに聞いていた太郎が、ほんの少しだけ動いた。
誰にも気づかれないほど少しだけ。

黄泉川の言葉を受けて舘がため息を漏らす。
「『不視神手』（ゴッドハンド）か・・・
学園都市８０万人の頂点にして最初の、そしてただ一人の超能力者（レベル５）。
分かっているのは能力名だけで、他はすべて謎。
どんな能力なのか、男なのか女なのかすら謎の能力者か・・・。
唯一やつの仕業らしいといわれているのがあの『銀河鉄道事件』だが、
まったくどんな能力ならあんな非常識なまねができるのか、
自分自身が能力者になった今ですら見当もつかん。
もし本当にやつが犯人なら誰も捕まえる事はできんかもしれんな。」
その言葉に黄泉川が急に立ち上がり拳を振り上げて叫ぶ。
「もしそいつが犯人なら、たとえ学園都市最強のレベル５でも悪いことをしたやつは捕まえなきゃダメじゃん！みんながあきらめても、わたしはあきらめないじゃん！」と宣言する。

その言葉にずっと黙っていた太郎がくすっと小さく笑いながらようやく口を開く。
「そんな出来事があったなんて・・・知りませんでした。
先輩、勿論他言はしませんので安心してください。
それに僕にも教えてくれてありがとうございました。

普段からここにかなり出入りさせてもらってるから、
万が一風紀委員と間違われたら危ないから注意しろってことですよね、
ありがとうございます先輩。」

その言葉に舘はニヤリとしながら
「あんな話のあとで言うことではないんだろうが・・・・。
太郎君、いつもいうことだが正式に風紀委員の資格試験受けてくれないか？
その頭の切れ、君になら俺のあと安心してこの支部と暴走しがちな黄泉川を任せられる。
おっとまるで父親の台詞だな、まぁ本心だがな。」とからかうようにいうと
黄泉川の顔が真っ赤になり、舘に反論しようとする。
しかし横合いから先に太郎が
「愛穂ちゃんのことはともかく、風紀委員は僕には勤まりません。
とてもじゃないけどそんなことができる人間じゃありませんから。
あと今日は愛穂ちゃんをこのまま送って帰ったらいいんですよね？」
と笑いながら返す。
その答えに、まったく残念だ、と肩をすくめる舘を尻目に今日一番真っ赤になった黄泉川愛穂嬢は太郎に猛烈な攻撃を開始。
「あああああああ、あんたはいつもいつも！なにがともかくじゃん！何回言っても太郎の癖に生意気じゃんって言ってるのが分からないのかぁあああああああああああああ！！」
「痛い、首ねじ切れるって愛穂ちゃん！死ぬ！脳細胞がすごい勢いで死んでるのがわかるっていたい、お願いかんにんしてえええええええええええ」
あきれるほどいつもの光景に今日はじめて本当に笑った舘であった。

第一章　Chapter2（後書き）

いつの間にか消えててショックでした・・・・・・
うぇ～ん
まぁ前よりいいものできたしいいか・・・・・・

第一章　Ｃｈａｐｔｅｒ３（前書き）

できました、ＵＰします。あの方もあの方も登場です。

チャプター２書き直しのため少し修正しました。

第一章　Chapter3

3

夕暮れ時の学園都市を二人で黄泉川の住んでいる寮に向かって歩きながら、黄泉川は太郎に相変わらずブ～たれていた。
「何で舘先輩にあんなこと言ったじゃん。
私は小学生じゃないじゃんよ、しかも普通逆じゃん？
私が太郎を送るって行くのが普通じゃん、だって私は風紀委員であんたは一般の生徒だし。」」

しかし、太郎は穏やかに反論する。
「理由その1、今回の事件はおそらく舘先輩の言うとおり風紀委員が狙いだと思うから、危険性は一般生徒の、しかも低能力者の僕より、無能力者とはいえ風紀委員、しかもそれなりに有名な愛穂ちゃんのほうがずっと高いはず。
理由その2、詳しく話を聞いたわけじゃないから断定はできないけど、おそらく襲われた人達はたぶんみんな単独で巡回してたと思うんだ、実力者だからこそね。だから複数の人間が警戒しながら行動している場合、襲われる危険性は下がることが予想できる。
最後に、僕はこれでも男の子だから、女の子が危ない目にあうかもっって痛い、公道でヘッドロックはやめて、痛いし、恥ずかしいし、当たってるし、頭割れる！しぬぅうううううう！」
「何かあったときの、あんたのその妙に冷静ぶったものの言い方がムカつくんじゃんよ！太郎の癖にいつもいつも生意気じゃん！」
黄泉川がヘッドロックで太郎の頭を万力のように締め付けていた、やはり、顔は真っ赤だったが。

少し気が済んだのか、太郎のギブアップの手に力が無いことに気づ

いたのか、ヘッドロックを解く黄泉川。
しかし内心では、
（こいつはほんとおかしいじゃん、私が何やっても私を女の子扱いをやめないじゃん、調子が狂って仕方ないじゃんよ。大体私のどこが”おんなのこ”じゃん！）といった風に悶々としている。

一方太郎は、先ほどまでの天国と地獄のダメージからまだ立ち直れずにいたが、内心では
（なんで愛穂ちゃん、女の子っていうと怒るのかなぁ・・・う～ん理解できないや。）と
首を捻っていた。

ちなみに街中だったために、帰宅中の通行人が少なからずおり、
彼ら（特に男）から
（痛そうだけどウラヤマシイ）
（巨乳ツンデレ女子高生萌えええェェェェェェェ！！！！！！！）
（あの胸で窒息死してえええええええええええええ）
（あの地味男、チネばいいのに）
（リア充爆発しろ！）などと思われていたのは言うまでもない。

そんなこんなで、まもなく黄泉川の女子寮というところで、背後から
「あら愛穂、早かったじゃない。
しかも同伴帰宅？私どこかで時間つぶして来ようか？」とクスクス
笑いながら声をかけてくる落ち着いた雰囲気のある白い制服の少女。
彼女は、芳川（よしかわ）　桔梗（ききょう）といい長点上機学園の2年生で
黄泉川とは中学時代からの友人で、現在はルームメートである。

「太郎君もお久しぶり。

いつも大変ねぇ、愛穂のお守り。
で、今日はデートの帰り？もし一線越える気なら私のことは気にせ、ぶッ」
「き～～～きょ～～～～～う、あんたいきなりあらわれて何訳分かんない事
口走りまくってんじゃんよ！
本気で命がいらないみたいだから、今日があんたの命日じゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
死神と化す黄泉川が芳川に見事なチョークスリーパー、白目をむく芳川、それを必死に止める太郎。
「ぎふ、ぎふ、あひひょ、わらひがわるかっひゃから、いひが、あ、めのまえがまっきゅらに・・・」
「愛穂ちゃんストップ芳川さん死んじゃうから、ストップ！」

しばらくしてようやく落ち着いた2人、まだ芳川はぜーぜー言っていたが。

それを見届けて、太郎が手を挙げる。
「じゃあ愛穂ちゃんまた明日。
芳川さんはお大事に。」
とあっさりさよなるを告げる太郎に、二人は
「ちょっと待つじゃん太郎、お茶ぐらい飲んでけじゃん。」
「そ、そうね、私も久しぶりに少し話したいし、あがっていけば？」
と同じように引き止めるが、太郎はそれに首を振り、
「ちょっと用事が。
ごめんね、また今度ゆっくりと。
愛穂ちゃん、芳川さんさようなら。」
といい会釈をすると見送る二人を背に、そそくさと家路についた。

黄泉川と芳川の二人と別れて数分後、
太郎はやはり普段より多くなっている警備員たちの姿を見るともなしに見ながら自宅に向かって歩いていたが、周囲に人影がなくなったとたん太郎の携帯が鳴る。
とたんに普通の少年の気配が変わる、”普通”から程遠いものへと。
うんざりした態度で、かつ目だけは鋭く尖らせ、彼は通話ボタンを押す。

『やぁ、よかったのかね？彼女たちとのお茶会は。
その程度の時間は問題なかったのだが。』

その声はあまりにも聞きなれた、あまりにも予想通りの人物の声。
学園都市統括理事長、アレイスター＝クロウリーのものであった。

第一章　Ｃｈａｐｔｅｒ３（後書き）

ご意見、ご感想待ってます。
あと原作新約１冊しか持っていないため、微妙に原作に対する描写など
おかしいなっておもったら突っ込みお願いします。

芳川さん&アレイスターあっさり登場（笑）

第二章　闇に集う猟犬とうごめく影　Ｃｈａｐｔｅｒ１（前書き）

え～今回はかなり汚い言葉が飛び交います。
もしお嫌な方は読むのをやめてくださいね。
あとご意見は可能な限り反映したいと思っていますので
よろしくお願いいたします。
今回はサブタイトルを修正いたしました。ありがとうございました！

第二章　闇に集う猟犬とうごめく影　Ｃｈａｐｔｅｒ１

１

「お断りします。」
一言で電話を切ったにも関わらず、変わらず携帯から響き続ける声。

『つれないな、では今回の依頼の内容を。
もう既に風紀委員連続襲撃事件については知っているね？
それに対する対応を頼む。』
「・・・・・・・・・。」
『沈黙は、是ととらせてもらうよ。
他の者たちにも通達はしておいた。
では、あとを頼む。』
「悪趣味にも程がありますね、相変わらず。
統括理事長の趣味が覗きと盗聴とは。」
『今の私にはそれくらいしか楽しみが無くてね、そこは許してもらいたい。
君はよく知っているだろう？その理由を。』
「・・・・。」
『では頼む。』

通話が切れると同時に大きなため息をついた太郎は、
「さてと、行きますか。」と言って歩き出した。

第一学区、統括理事会理事長の居城と言われる
『窓のないビル』の建つ学園都市の中心であり各種の公的機関、
および重要な研究機関のためのビルが、件のビルを中心に

整然と立ち並んでいる、まるで墓標のように。
一方、ここには相応の土地を必要とする学校は存在しない。
しかも時刻は完全下校時刻を完全に過ぎた深夜。
にも関わらず、非常に場違いな影がひとつ、カッターシャツ姿の学生である。
そのうちに彼ー鈴木太郎　は路地裏に入り、少ししたところにある何の変哲もないビルの
ドアを開き、その先に続く長い地下への階段を下っていった。

扉、セキュリティー、そしてまた扉、いつもながらここに入るのはいちいち面倒だな、と
思いながらこの先繰り広げられるであろうさらに面倒な一連のやり取りを思い、
大きくため息をついてから、太郎は扉を開けた。

「お、お、お待ちしておりました、お、お兄様。
す、す、すぐにお茶を、そ、それともコーヒーが、よ、よろしいでしょうか？」
部屋に入ってきた太郎を、ある少女が緊張した様子で出迎えてきた。
彼女の名前は二上（ふたがみ）　知美（ともみ）。
その姿は、太郎と同級生、つまり高校2年生にも関わらず、
中学生にしか見えない童顔と背丈で、メイド服で、丸メガネで、ツインの三つ編みで
おでこちゃんという、なんとも外見的特徴を過剰搭載した少女である。
ーーー実は内面はそれすらも遥かに上回るのだが。
ちなみになぜメイド服かというと、
彼女がメイド教育を専門にする繚乱家政女学校の生徒で、
メイド見習修行の一環として、

校外でも基本メイド服の着用を義務付けられているためである。

太郎は苦笑しながら
「知美ちゃん、いつも言ってるけど”様”は禁止。
せめてお兄ちゃんくらいだとうれしいな。
あと僕はコーヒーをブラックでお願いします。」というと、
知美は恐縮しきった態で、
「ももも、申し訳ありません！で、ですが、お、お兄様はお兄様ですので！
そ、それではすぐにコーヒーをご用意いたしますので、お、おかけになってお待ちくださいませ。」
といって備え付けの台所に飛び込む知美を見送って太郎が奥に向かうと
少女と青年がが座っていた。
「う～～～っす、あにやん。」そう太郎に呼びかけたのはラフな格好をしたハーフらしいショートカットの金髪少女。
「おそかったですね、太郎ちゃん。」こちらは眼鏡をかけた白衣の落ち着いた雰囲気の青年である。

太郎を”あにやん”と呼んだ金髪ハーフの少女の名を、アンナ・U・火ノ原。
白衣の青年の名を鴨居（かもい）　保久（やすひさ）。

「遅くなってごめんね。」と答えるに留めてソファに腰掛ける太郎。
そこに
「お、お待たせしました、こ、こ、コーヒーでございます。」
とコーヒーを運んできた知美。
口調はどもっているが、手元は完璧である、さすが繚乱家政女学校。
苦笑しながらありがとう、と受け取って太郎が飲もうとしていると、
ーーーアンナが爆弾を投下する。

「お～い、そこのいろいろ狙いすぎのクソメイド、おれにもコーヒー。」

その一言にはにかみながら笑顔で太郎を見ていた知美の顔がアンナに向けられると
次の瞬間、知美の顔が能面のように変化。
それに伴い室内の空気が氷点下まで下がり、男二人の吐くため息で釘が打てる状態に。

そして口火を切るメイド。
「あらあら、お黙りくださいな、このパツキンフ〇ッキン男女様。
そんなに何かお飲みになりたいのでしたら、
そちらにございますおトイレの水でもお飲みあそばせ。
あなたの口臭と同じ臭いがいたしますので、さぞかし普段からお好きなのでしょうし。」
「あぁん？いい度胸じゃねえか、てめぇ。
要素が多ければ勝ちとか思ってんじゃねえぞ、狙いすぎなんだよ、この腐れ一人姉妹。
吹っ飛ばしてやろうか、コラ。」
男勝りの口調でアンナも応戦する。

次々飛び交う罵詈雑言、男性二人はいつものことで慣れているとはいえ苦い顔である。

「あらあら、私だけでなく姉さまにまで失礼極まる発言を。
どちらか選んでいただけますか？
私に社会的に抹殺されるか、姉さまに物理的に抹殺されるか。」
「逆にてめぇに、いやてめぇらに質問だ。
好きな死にかたを選ばせてやる。
首から上を吹っ飛ばされて死ぬか、首から下を吹っ飛ばされて死ぬ

かだ。
さっさときめろバカ姉妹。」
ここで知美の口調が慇懃無礼な口調が一変し、切りつけるような口調に変わる。
「相変わらず素晴らしくふざけたことを言っているな、貴様は。
どうしてもあの世へ行きたいらしい。
今なら私が親切にも直行便で送ってやろう、もちろん片道キップだが。」

その口調の変化で”代わった”ことに気づいたアンナが、
「出やがったな奈美、引きこもりは引きこもりらしく・・・」とまで言ったところで
いつもの通り、”彼”の声でこの戦いは終了した。

「アンナ、知美、奈美、少し黙れ。」
静かに告げる太郎の声に二人が口を閉ざして下を向く。

おとなしくなったのを確認した太郎が冷徹な声で淡々と続ける。
「女の子がそんな汚い言葉を使ってはいけないよって何度言えばいいのかな？僕は。
喧嘩をするために集まったわけじゃないんだよ？わかってるよね？
じゃあ、お互いにごめんなさいしなさい。」と促す。

その淡々とした言葉の恐ろしさに
「ごめんなさい・・・」と素直に謝る二人を見て太郎は表情を戻し、誰ともなしに尋ねた。
「ところであの人はまだ来ないのかな？それとも呼んでない？」
それに答えたのは今まで無言だった鴨居であった。
「あぁ、今回の案件は”こっち”がらみの可能性が無きにしも非ず、だからね。

彼は呼んでないらしいよ。
そうだよね？知美君。」
鴨居の質問にうなだれていた知美がはじかれたように立ち直った。
「は、はい。
こ、こ、今回あの方は、し、詳細のはっきりしない現段階では、
よ、呼んでいないようです。
こ、個人的にも、あ、あの様な下種な方は不要かと思いますし。」
と言えば
アンナも
「むかつくけどこの女にさんせ～。あいつには後始末と便所しか似合わねぇ。」
さらにまた知美の口調が変わる。
「私もはなはだ不本意だが同意する、やつと同じ空気は極力吸いたくない。」
そして最後に鴨居が
「いや～嫌われてるよね～彼。
まぁ僕も大嫌いだけど♪
ねえ太郎ちゃん今度さくっと殺していいかな？」

再びひどい言葉を使う女の子たちと年上の同僚兼友人に注意しようかと思ったが、
言われるほうにも問題があるので思いとどまる。
そして本日最大のため息を吐きながらなぜ自分の回りには変人しかいないのだろうかと、
足元を見つめることしかできない太郎であった。

第二章　闇に集う猟犬とうごめく影　Ｃｈａｐｔｅｒ１（後書き）

え～ありがとうございました。
とりあえず彼らの詳細は彼らの力と共に公開するつもりですので、
しばし進行をお待ちください。

なおもう一人は、原作に登場する方です。
イメージ壊れたらごめんなさい・・・・・。
ちなみに誰でしょう？簡単かな？？

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ２（前書き）

できました。ちょっと説明多いっす。

第二章　Chapter2

いまだここにいない”彼”への口撃にいまだ盛り上がるメンバーにげんなりしながら
話を進めるためにパンパンと手を叩き、太郎は強引に話を変えた。

「もうそのへんで、さすがに気の毒になってきたし・・・。
ということでブリーフィングを始めようか、アンナちゃん準備はできてるかな？」
太郎に話を振られたアンナがうれしそうにこれに答えた。
「もっちろんだぜ、あにやん♪
おいクソメイド、さっさとおれのデスクにある資料を配れ。」
「私に命令しないで下さる？この男女様。
あ、お、お兄様、こ、こちらが資料です。」
相変わらずの応酬の中配られる数十ページにも亘る詳細な今回の事件レポート。

それらがいきわたったのを見計らいアンナがレポートをばさばさと振る。
「んじゃはじめま～す、いつもどおり質問はおれの話が終わってから～。
まず今回の”風紀委員連続襲撃事件”だけど昨日一日で４人、
二人が強能力者、二人が大能力者やられてる。
まぁなんにせよやられたやつが雑魚すぎんだけど、
にしてもいろいろと解せない点が多すぎ。
まず～、被害者たちの目にも監視カメラにも何にも写っちゃいねぇ、
これはデータ洗って確認済み。
これに関しては見当ついてるけど、とりあえずあとまわし～。
つぎに～、襲撃時間と場所の分布。

最初の襲撃が１８時５分、第１８学区長点上機学園近くの路上。
その約３０分後第３学区で一件、さらにその５０分後、第１２学区で一件。
最後はだいぶ時間が開いて２２時１８分第５学区で一件ってとこだ。
まぁ普通に考えて最初の３件を同一犯が単独でやるのは無理～。
どんな手段を使ったってそもそもそんな短時間じゃ移動にぎりぎりの時間しかねぇし。
最後に～、最初にやられた風祭ってやつと他の３人では怪我の具合が違いすぎるとこ～。
資料の５ページ目から３ページにわたって、やられた奴らの写真なんだけど、
見て分かるように風祭だけ極端に酷くて、頭蓋骨陥没をはじめ全身ボコボコ。
それ以外のやつは後頭部打撲か亀裂骨折程度の軽傷、まぁ風祭ってやつに比べればだけどな～。
さてとりあえず表面的な情報は今んとここの程度だ～。」

説明を一度打ち切ったアンナが全員に促すと、太郎がそれを引き取って話し出す。
「アンナちゃんご苦労様、んじゃ問題点を整理していこうか。
問題点その１、そもそも風紀委員だけを狙う犯人の動機。
問題点その２、犯行方法、つまりなぜ誰にも見えず、カメラにも写ってないのか。
最後に、アンナちゃんが言う通り、犯行全体は複数の人間が関わっているのは
まず間違いないが、肝心の実行犯が単独犯か複数犯かってとこかな。
大雑把だけどね。」
一度話を切ってコーヒーを一口すすってから続ける。
「その１に関しては風祭先輩に関してはおそらく怨恨。
他は不明って感じだね、ついでなのか他に意味があるのか、どう思

う？保久さん。」

名前を呼ばれた眼鏡をかけた白衣の男、鴨居が顔だけ太郎のほうを向きながら、

「『木を隠すには森の中』かな？だとしたらお粗末だねぇ。

そもそも何で風紀委員を狙うの？学園都市の治安の破壊が目的、いやその先かな？」

と自分の意見をまとめる。

「その先とはいったいどういうことでしょうか？」

首をかしげて尋ねるメイドさんに鴨居は説明をしてやる。

「そもそも風紀委員は統括理事長と他数名の理事達の肝いりで設立された組織で

統括理事会内でも未だに是非が分かれているんだ。

つまり風紀委員を叩く事で、

最終的には統括理事長を叩きたいのかもしれないって思ったのさ。

まぁあの化け物にそんなものが通じるわけ無いけど。

どうせ今度のこともわざと見逃してたに決まってるしねぇ。」

と苦りきった顔で鴨居が言う。

太郎が苦笑しながら、

「まぁ今あの人の意図を考えても仕方ないからね。

まぁ動機はそんな感じだろうね。

あとは実行犯がどこの誰かってことだけど、アンナちゃん？」

名前を呼ばれたことに喜んで体ごと太郎のほうを向くアンナがそれを苦々しげに見る知美を一瞥してから太郎の質問に、

「今回のことが可能であろう能力は二つ～、

一つは『風力使い』（エアロシューター）、だがおそらくこれは無い。

これで学園都市最強の同系能力者である風祭のやつはやれねぇ、絶対に気づかれる。

もう一つは、『光学迷彩』（ボディステルス）～。
光の屈曲を操作して本来見えるものを隠したり、見えないものを見せたりする
能力らしいんだがなんだが、実はこっちも問題がある。
書庫（バンク）で調べたんだが、この能力はまだ強能力者（レベル３）が最高で
それも一人だけ。

ただ動機に関しては、黒も黒真っ黒だよこいつ。
資料の１０ページ目見てくれ、『黒皿　洲』（くろさら　しゅう）
ってんだけど
まず元風紀委員で、真性のペド野郎。
風紀委員を隠れ蓑に、まぁいろいろ下種なことをしてたらしいんだけど
風祭に捕まって学校も風紀委員もクビ。
そのあと姿を消したらしいから、まぁこのカスが犯人だと思うぜ、
少なくとも風祭に関してはな。

た～だ～し～、能力うんぬんだけにこだわると実行犯が一人だけになって、
距離と時間の問題が矛盾となって浮き上がってきやがる、って感じだな。
不可能ではないが限りなく不可能に近い、微妙なアリバイ工作、
あちらを立てればこちらが立たずってな。
明らかにプロの仕事だねぇ・・・。
まぁもうひとつ”あっち”の連中って可能性もあるが、
そっちはおれの専門外だし分かんねぇしな。、
あとの問題は裏が中のやつか、それとも外のやつかってとこか～。
んであにやん、どう思う？」と答え、更なる質問で返すアンナ。
ちなみに書庫（バンク）とは、学園都市の総合データベースで、基本的に生徒

や能力など学園都市に関わる最新情報の全てが登録されているものである。

太郎は両手を挙げて降参～のポーズをとりながら話を進める。
「まぁいくつか思いつくけど確証がないから今日はご勘弁を。
じゃあここらへんで切り上げて、明日以降の方針を決めようか。
アンナちゃんは、ひきつづきここで風紀委員たちの監視と黒皿に関する情報収集を。」
「あ～い。」とアンナ。
「知美ちゃんと奈美ちゃんは、僕と一緒にその黒皿を探しに行こう。
ただし服は目立たないものでお願いね。」
「はっはい！ね、姉さま共々喜んでお供いたしますです！」これは知美。
「保久さんは・・・とりあえず確認だけ頼むよ、まぁ無いと思うけどね。」
軽くうなずくことで了解の意を示す鴨居を横目で確認してから、太郎の雰囲気が変わる。

全員の背筋が凍りつく。
電化製品の音がやけに耳にうるさい。
口調こそ同じだが、先ほどまでのやさしくてのんきな声とは程遠い氷刃のような声が部屋に響く。

「さてさっさと仕事を片付けて僕達の”平凡”を取り戻そう。
今回はいろいろと僕も頭に来てるからね、みんなよろしく。」
その声は決して普段の彼の、平凡な少年のものではなかった。

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ２（後書き）

読了ありがとでした。
次の次あたりから能力が炸裂しだします。
そらもうどかんと。
感想、意見お待ちしてます。
ちなみに一章Ｃｈａｐｔｅｒ２を諸事情により書き直しました。すんません。

第二章　Chapter3（前書き）

なんとかできました。

第二章　Chapter3

3

自分の為の穴倉でアンナは自分の仕事をしていた。
周囲を隙間泣く埋め尽くす77個あるディスプレイと自分の相棒の熱に囲まれて。
今学園都市に存在する百八万三千六百十二台の監視カメラはすべて自分の目であり、かわいい子供、僕であった。
その記憶をすべて精査し今回の事件に関わりそうな情報をすべて洗い出す。
まず最初にしなくてはいけないのは、あのペド野郎を見つけること。
こうしている間も彼女の指は刹那も停滞しない。
人から見れば超人的な、彼女自身からすればなんでもない一連の作業をしながら頭の片隅で今日の出来事を考える。
今日のあにやんは特別機嫌が悪かった、この程度の事件で見せたことの無いものだと思った。
小さなため息とともに結論が出る。
どうせあの女絡みに違いない、あのじゃんじゃん五月蝿い巨乳女の。
もう少し胸があれば自分のほうを見てもらえるのだろうか？
自分のつつまし過ぎる胸を思って嘆息するが、おそらくそういうことではないとアンナは思う。

乙女の物思いの間にも目では追いきれないほどのスピードで処理されていく情報。

アイコンの音でアンナは現実に帰還する。
目の前のディスプレイに写るのは今回の重要参考人、最低のペド野郎が第七学区の路地裏を歩くライヴ映像。

獰猛な笑みとともに彼女はつぶやく。

「みぃぃぃぃ～～～つけた♪」

それは学園都市の闇に君臨する電脳世界の女王蜂の笑みだった。

昨日からのどうにも落ち着かない気分のままで黄泉川愛穂は、本日最後の授業である英語を受けていた。
右手にあごをついてを乗せ、鼻の下でシャーペンをはさんだ状態というとても女の子らしくない格好である。
担任の見た目がとてもではないが絶対に帰国子女には見えない関ちゃん（男性　２７歳　独身　彼女無し）が帰国子女らしいネイティブな発音で授業をしているのだがまったく聞いていなかった。
理由は自分でよく分かっていた。
どうにも今の状況は納得がいかない。
自分が風紀委員になったのは、誰かに侮られるためでも守られる為でもないからだ。
さらに今日登校してみたら太郎が欠席していた、これも気に入らない。
おかげで事件の話をすることも、太郎に八つ当たりすることもできなくなってしまった。
気になって電話をしてみたが、寝ているのか出なかった。
（あったまにくるじゃん……。）

頭を切り替えて今日どうするか考え始める。
できれば支部に行って今回の一件を自分なりに調べてみたいが、無駄だと思えた。
おそらく今あそこの端末からバンクへのアクセスは止められている

はずである。
だからと言ってあきらめる気は無い……
黄泉川さんの辞書には”仲間をやられて黙って引き下がる”なんて言葉は未来永劫載せる予定が無いのである。
どうするか……そう考える黄泉川の思考は担任関ちゃんの愛あるゲンコツの一撃でクラスの爆笑が起きるまで続くのであった。

一方、その頃太郎と知美は第七学区と第十八学区の境にある場所に来ていた。
このあたりは路地が多く、後にスキルアウトと呼ばれる学園都市のドロップアウト組達の根城になることからも分かるように、学園都市のグレーゾーンである。

太陽が天頂にあるためかビルの谷間にあるこの路地にもうっすらと光が差し込んでいる。
太郎は黒いTシャツにジーンズにつばの大きな帽子という、まぁ彼にとってただの私服という格好であったが、知美は普段の服装からは考えられないものであった。
まず眼鏡をしておらす、神は後ろで無造作にまとめている。
さらにTシャツにデニムのショートパンツという何ともボーイッシュな格好であった。
普段の彼女を知る学校の知人たちが見たならば、別人だと気づかないかもしれない。

二人が無言で路地を進む。
目的の雑居ビルを見つけ中に入ろうとしたその瞬間彼女は叫ぶ。
「兄様！」
その声と同時に、自身は前方に転がるように倒れこんだ。
一秒後彼女の頭部が存在した空間に『何か』が振り下ろされるが既

にそこには何も存在していない。
立ち上がり振り返った瞬間、奈美が見たものは見えない『何か』に拘束され、泡を吹きながら中に浮く金髪の男とそれをつまらなそうに見つめる太郎の姿であった。

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ３（後書き）

はい、今回も読んでくださった皆さんに感謝です。

今回地味にですが、黒皿捕獲班の二人は太郎たちはそれぞれの能力を使用しています。

使うって言ったのに地味ですいません！

実力不足です・・・・

感想等お待ちしてます～。

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ４（前書き）

難産でした…地の文章が一番難しい・・・

第二章　Chapter4

4

なぜだ、なぜこんなことに。
自分の身に起きているありえない事態に黒皿は息も絶え絶えになりながらも自問自答する。
自分の目の前の2人が自分を捕まえに来た人間であることは”あの人”からの連絡で
前もって知っており、万全の状態で背後から襲撃したにも関わらず、あっさりとそれをかわされ、さらに見えない力で『捕まえられた』。
黒皿は自分の能力である『光学迷彩』に絶対の自信を持っていた。
光を屈折することによって本来あるものを無い様に見せたり、無いものをさも存在するように見せつけたりするこの能力は既に人間の肉眼だけでなく学園都市製の超高性能監視カメラをも欺くのだ。
にも関わらず今の状態はなんだ？
中学生くらいの女に絶対の自信とともに振り下ろした一撃は難なくかわされ、あまつさえ見えないはずの自分がいつも簡単に捕まえられた。

俺は強くなったはずだ。
黒皿は考える。
今の自分はあの頃の、まだ自分がただの学生で風紀委員だった頃と違う。
あの風祭に、少し、ほんの少しかわいい小学生の女の子と仲良く楽しい遊びをしようとしただけなのに、
風紀委員などという面倒な仕事の報酬として当然与えられるべき権利を行使しただけなのに、

その自分を打ち据え、それが罪であると糾弾し、犯罪者として社会から追い出した
あのいけ好かない男に復讐するため”あの人”から能力の開発を受け、
非公式ではあるが大能力者並の力を身につけたこの自分がなぜ？
証明したはずではないか？
おとついその風祭ーーー学園都市屈指の実力を持つ大能力者にすら気づかせず、一方的に殴り、壊し、
復讐を果たすことで自分が強者であることを証明した自分がなぜ？
絶対にこいつらに自分の姿は見えていなかったはずなのに、今の状況はなぜだ？と。

そして四肢や顔は動かすことすらできず、何とか動かすことができる眼球だけを動かして目の前の二人を見る。
目の前にいるのは、自分好みの童顔の女。
もうひとりは帽子をかぶっており顔こそ見えないがおそらく高校生くらいの男。
しかしその普通にしか見えない姿と裏腹になぜか冷や汗が止まらない。
本能が告げているのだ、目の前の、この普通の男は普通ではないと。
（この野郎『念動力者』（テレキネシスト）か？人間一人吊り上げ続けれるなら最低でも強能力者、だがこいつのは、みっ身動きひとつできねえ……それに何だこの見えないでかい手で鷲？まれてるこの感覚、こんなの聞いたこともねぇ！本当に念動力なのか？いったいこいつら何者なんだ！？）

一方、太郎はそんな黒皿に目もくれず先ほどから感じている違和感の正体について考えていた。
（おかしい、監視カメラなどをアンナが支配下においている現状でなぜこちらが奇襲された？見られていた？）

奇襲自体の危険性ははっきりいってどうでもいい。
傍らの少女にそれを成功させるのは、黒皿の失敗が証明した通り不可能に近いし、自分にいたってはやられたところで何の問題も無いのだから。
それより問題はどうやって誰がこちらの索敵にひっかからずこちらの動向を彼に伝えたのか？である。

今回の事件内容を再度検証するため高速回転する太郎の思考。
この事件は黒皿の単独犯でなく、複数犯の可能性が高かったこと。
襲撃事件のいずれのケースにおいても、監視カメラに写っていなかったこと。
確実に裏がいること、まで思い出して内心苦笑する。
何のことはない、自分達は黒皿を餌として釣り上げられた魚なのだ。
となると……

現状彼らがいるのは黒皿が隠れ家にしていた雑居ビルの一階で、コンクリートがむき出しの
物寂しい空間である。
隣にはポニーテールの少女が信頼のこもった視線でこちらを見ている。
次に起こるであろう事態に、手招きをして少女に自分に近づくように指示しながら
太郎はこの場にいない相手に声をかける。

「学園都市の上層部では、よほど覗きが流行っているようですね。
どうせ第一研（第一能力研究所）あたりの人間でしょう？
彼の能力を基にしたボディースーツでも作りましたか？
で、僕に対する宣戦布告代わりに不要になった彼を餌にして僕らを釣り上げた……。
どうせそんなところでしょう？黒幕さん？」

その声に応えるように、ビル備え付けのスピーカーにスイッチが入り声が響きだす。

「いやはや、たかだかその程度の情報量でよくぞそこまで答えに近づいたものだのぅ。
さすがは『不視神手』（ゴッドハンド）よ。」

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ４（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました。
能力無双早くしたいですが、諸事情によりまだ無理・・・
こんなプロット組むんじゃなかった・・・・

ご意見、感想お待ちしております

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ５（前書き）

できました。誤字脱字、あ～したほうがいい、こうしたほうがいい。ありましたら教えてください。

第二章　Chapter5

5

空中に宙吊りにされ続けている黒皿が、その『不視神手』（ゴッドハンド）の示す意味に絶句している中、太郎は何でも無いようにスピーカーの声に応える。

「自己紹介がいらないようで助かりました、どうにも苦手なんですよ。

『なんたらなんたら（能力名）』とか自分でいうの恥ずかしいでしょ？

で、なんとお呼びすればよろしいですか？黒幕さん？研究者さん？学園都市の裏切り者さん？まぁ何でもいいんですがね。」

「ふむ、その中では研究者がええのじゃが、じゃがわしの希望は『博士』じゃな。

よりアカデミックじゃろ？にしても現状を正しく認識しておるじゃろうに、さすがは学園都市唯一にして最強の超能力者（レベル５）じゃな、声に乱れ一つない。

それにそこにいるのは『二重能力』（ダブルスキル）の二上姉妹かね？

なるほど、それならばその男の『光学迷彩』が通用しなかったのも納得じゃ。

姉の……名前は何じゃったかな？そうそう奈美くんの『振動干渉』（ウェーブインターフェレンス）ならば、ソナーの原理で音波を使い対象物が視覚的に見えなくても問題は無いというわけか。

さらに捕獲後は妹の……知美くんに『替わり』、彼女の能力である『記憶操作』（メモリーマニュピレーション）でその男の記憶から情報を引き出そうとしておったのか……。

うむすばらしい！実に合理的じゃ、さすがは学園都市最高の頭脳じゃ！」

スピーカー越しに響く『黒幕』、改め『博士』の長口上が途切れたところで今までずっと無言だった少女ーー二上奈美が口を開く。

「ご老人、長々と私達の品評をしてくれて感謝する。だがいくつか申し上げたい、まず私も私の妹も、貴様のような人間に誉められて喜ぶほど悪趣味ではない。名前も呼ぶな、不愉快極まりない。そして何より貴様ごときが、我らの兄様に、そのような口を利くこと我ら姉妹が断じて許さん。」

裂帛の気合を秘めた口調で『奈美』が虚空を睨む、その先に老人が存在するかのように。

そんな奈美の言葉にも老人は動じない。

「……嫌われてしまったかのぅ。どうやら世間話がお嫌いのようじゃから、用件を言おうかのぅ。『不視神手』（ゴッドハンド）よ、そなたの能力についてわしに調べさせてほしいのじゃ。わしはもう誰かが出したデータでは物足りんのじゃよ。知りたくて知りたくてもぅどうにも溜まらんのじゃ。すべての超能力開発の雛形（アーキタイプ）を自分の手で調べたいのじゃ。何もそんなにむつかしいことではないじゃろう？少し頭と体をいじらせてほしいだけなんじゃよ、どうかの？」

どす黒い自らの欲望をかけらも隠そうとしないスピーカー越しの声。揶揄するような口調は未だ変わらず『博士』は軽いお願いかのようにその『お願い』を告げた。

その言葉に激昂しそうになる奈美に、落ち着くように太郎は手を彼女のほうに向け軽く振る。

その行動をみて不承不承押し黙る奈美を横目に太郎が『博士』に尋

ねる。
「僕がお断りしたら、どうなさるおつもりですか？」
「どうもしないのぅ……その場合はわしのやりたいようにやるだけじゃのぅ。」
沈黙。
ただし恐ろしい程のプレッシャーがその場を埋め尽くしていく。
太郎にとらわれたままの黒皿はもう息も絶え絶えの状態で、状況の推移についていけないでいる。
どれほど経っただろうか？一分？十分？一時間？黒皿には無限に感じられるような時間、
実際にはそれほどではない時間が経ってから、黒皿を一瞥しおもむろに太郎が再び口を開く。
「彼は回収しなくてよろしいので？」
「その男は用済みじゃし、わしにつながる情報はなにももっとりゃせん。
好きにしてくれてかまわんよ、わしからのプレゼントじゃ。」
その言葉に、愕然となりわめきたてようとするが、太郎の帽子のつばごしの視線に再び押し黙らせられる黒皿。
そこに再び響く狂気と愉悦をないまぜにしたスピーカー越しの声。
「しかたないのぅ……体をいじらせろとはもぅいわんわいのぅ。
では代わりにわしのお遊びにつきあってもらおうかのぅ。
これならどうじゃ？」
先ほどから太郎の口調も表情もまったく変わらない。
たまに見るものを変えるくらいでほとんど身動きもしていない。

ただし彼の纏う気配は時間の経つ毎にどんどん冷たく重くなっていく。
まるで圧縮された氷塊がそこにあるかのように廃ビルのエントランスを支配していた。
変わらぬ口調で告げる。

「いくつか条件があります。
ひとつ、無関係な一般人を今後一切巻き込まない。
ひとつ、今日が木曜日ですので日曜までにあなたのお遊びとやらを終わらせてください。
あまり長々とお付き合いするほど僕も暇ではないので。
どうです？これを守っていただけるならあなたのお遊びにお付き合いしますが？」

太郎のその言葉に、スピーカーから老人独特の高いしわがれた笑い声がエントランスに響きわたる。
それは不快極まりないもので、奈美が顔を顰めて太郎のほうを見るが太郎は目線だけで抑えるように諭し老人の返事を待つ。

「よかろう、ではそこの用済み君の携帯電話をまず受け取ってくれ。
今後はそちらに連絡するからのぅ。
ではさっそく最初のゲームじゃ、わしからのほんのご挨拶の贈り物よ、受取っておくれ。」

スピーカーの電源が切れる音とともに、奈美がはっとしたように顔を上げて何か言おうした瞬間。

直後に鳴り響くビーという電子音。
それは『博士』からの贈り物、廃ビル一棟を丸ごと瓦礫の山と化すプラスチック爆弾のスイッチが入った音だった。

第二章　Ｃｈａｐｔｅｒ５（後書き）

はい読んでいただいてありがとうございました。

簡単なアンケートなんですが、この後（この話）が終わった後次に読むとしたら

１　同じような長編？な感じ

２　日常に目を向けた短編をがんばる。

どちらがいいですかね？ご意見ください。

第三章　表と裏　中と外　Ｃｈａｐｔｅｒ１（前書き）

何とかできました。楽しんでいただければ幸いです。
オリキャラ２人投入します。あしからず。

第三章　表と裏　中と外　Ｃｈａｐｔｅｒ１

1

黄泉川は放課後一人で第7学区の表通りにあるオープンカフェに来ていた。
この店はイタリア帰りのマスター（バリスタというらしい）が経営していて、エスプレッソもドルチェも手ごろな値段でおいしいと評判の店なのだ。
黄泉川も常連とはいわないものの、ルームメイトの芳川や風紀委員の後輩などとたまに利用する店なのである。
今も多くのお客さんで賑わっている。
多くは女学生で、テーブルごとにそれぞれ違う制服の女の子たちが楽しそうに
午後のひと時を楽しんでいた。

（みんな楽しそうでいいじゃんよ……。）

それをぼ～と眺めながら、黄泉川は舘たちの巡回が終わるのを待っていた。
どうしても現状を知りたくて、担任関ちゃんの説教からなんとか逃走後すぐに舘に連絡。
すると巡回終わりにここに立ち寄るからと、ここで待ち合わせすることになったのである。

行き交う人々はいつものままだったが、やはり警備員の数が普段より多く
それを不審そうに見ている人もいる。
そんな街の風景を見ながら、あるべき所にいない自分の今について

考えていた。

黄泉川は思う。
自分は考えたり、悩んだりが得意ではないと。
そういうのは別の人間の仕事だと。
壁があったらとりあえずぶっ壊し、悪いやつがいたらとりあえずぶん殴るのが黄泉川さんなのである。
でも今回の件はそうもいかない。
仮に独断専行で自分が犯人を捕まえて解決したとしよう。
その場合、『高位能力者』という面子を大事にする連中は風紀委員から離れていくだろう。
自分はそんなやつらならいらない、とも思うが能力者同士の事件の仲裁や解決に
より強い能力者の力が必要なのは言うまでもなくその活動に問題が出る。
かといって現状を認めてしまい、仮に能力者たちが今回の犯人を捕らえた場合
バカどもが増長して手がつけられなくなるのは目に見えている。
あちらを立てればこちらが立たず、犯人が見つかってもどう事を収めればいいのか
正直見当もつかない、知恵熱がでそうだ。
そのくらいは自分にも分かるため今うかつな事はできない、できないのだが。

(我慢できないじゃんよ！
あ～～～～～～～～～～～～太郎の奴こういう時に何でいないじゃんよぉ！)

八つ当たりの相手(ヒドイ)がいない事に歯噛みする思いで、急に無言で頭をかきむしる黄泉川に周囲の女の子がびっくりしているが、当然そん

なことには黄泉川さんは気づかない。

そんな風にしながら太陽の放つ色が赤みを帯びたものに変わる頃、ようやく待ち人たちが現れた。

一人は堂々とした厳のような体躯を濃紺のブレザーに包んだ男性、舘唐雄。

一人は剣山のように髪の毛を逆立てた学ラン姿の少年、鳴神真哉（なるかみ しんや）。

一人は第7学区にある世界有数、学園都市でも5本の指に入る私立の名門女子中学校であり
強能力（レベル3）未満の能力者は王侯貴族であっても籍を置けないという常盤台中学の夏服に身を包んだ、ボブカットの少女、明日真（あすま）映見（えみ）。

3人のうち舘と明日真は強能力者（レベル3）、
鳴神に至っては風祭と同格の大能力者（レベル4）である。

「おそいじゃんよ～みんな～。」とけだるげに言う黄泉川に
「すまん、待たせたな黄泉川。」と返す舘
「すいません先輩、お待たせしてしまって。
あぁ、お会いしたかったですぅ～せんぱ～い。」やたら体をくねくねさせる明日真。
「……よぅ、久しぶり。」その強面を赤くして黄泉川のほうを見ずに声をかける鳴神。

黄泉川の左隣に座った明日真が椅子を寄せて黄泉川にしだれかかる。
「あ～癒されます～、久しぶりの先輩のかほり最高ですぅ～。」
「毎度のことながら映見、わたしにそっちのケはないから離れるじ

ゃんよ……。
それに3日くらいで久しぶりとかいわないでほしいじゃん……」、
「そんなことおっしゃらずに…あぁいつ見ても大地母神もかくやかと思わせる先輩のお胸
……今日こそその天国に！ぶふぁ！」
「……いい加減にするじゃん！わたしにそっちの趣味は、無い！」
名門常盤台中学のお嬢様の過剰なセクハラを鉄拳で制裁する黄泉川。

そのやりとりを見ていた男性陣二人は
「毎度のこととはいえ……俺はこいつらに自分の抜けたあとの支部を任せなければならんのか…。」
「……舘の旦那……ご苦労お察しします……。」

第三章　表と裏　中と外　Ｃｈａｐｔｅｒ１（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。
台詞つきのオリキャラが出てきましたので、ご紹介を。

オリキャラＮＯ３
明日真　映見　（あすま　えみ）

常盤台中学２年生の大能力者（レベル３）
能力は『遺留思考』（サイコメトリー）
具体的には物に触れることでＡＩＭ拡散力場の残留物を調べることができる。
（そういう意味ではわたし達の思うサイコメトリーとは少し違いますね。）

風紀委員第１７７支部所属。
ボブカットの見た目可憐な少女だが百合で黄泉川に首ったけ。
はい、黒子意識して設定したキャラです、すみません。

名前の由来はサイコメトラーＥＩＪＩの主人公の妹の名前＋”見”るです。べたでごめんなさい……。

オリキャラＮＯ４
鳴神（なるかみ）　真哉（しんや）

第７学区にある高位能力が多く通う男子高校の２年生。
能力は『電撃使い』（エレクトロマスター）の大能力者（レベル４）
発電系能力者は数が多いが、それでもこの当時の学園都市で五指に入るほどの力の持ち主。

力の制御力よりも出力に優れ、
体術も得意な為風紀委員でも随一の武闘派の一人。

剣山のように髪の毛を逆立てた学ラン姿（某「今日からOは」の伊Oさんを想像してください）がデフォルトの姿。

第7学区にある黄泉川たちとは別の支部所属の風紀委員。
性格はどちらかというと熱血だが、暑苦しいほどではない。
黄泉川さんに対しては……って感じです。

名前の由来　雷＝ナルカミ　真哉はなんとなくです。

ご意見ご感想誤字脱字のご指摘などお待ちしております。

第三章　Ｃｈａｐｔｅｒ２（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした……。
最後までのプロットは既にできているのですがなかなか文章にできませんで・・・・では楽しんでいただければ幸いでございます。

第三章　Chapter2

2

「つまり、現状は”最悪”ってことじゃん？」

今回の件の昨日からの一連の流れを舘たちから説明されて、黄泉川はそう表現した。
舘たちもその言葉に同意するようにそれぞれうなずく。

現在彼らは先ほどまでのオープンカフェではなく、黄泉川たちが所属する第１７７支部の
事務所にいた。
とてもオープンカフェのような一般人のいるところでできる内容の話ではなかったためである。
目の前に置かれたティーカップから芳しい紅茶の匂いが漂ってくる。
学園都市はおろか世界に冠たるお嬢様学校である常盤台中学の生徒である明日真は当然といえば当然だが彼女自身もかなりのお嬢様である。
今入れてもらった紅茶も１００グラム何千円という超高級品らしいのだが、今の黄泉川にそのありがたみを感じる余裕は無かった。

一日経って事件は何の進展も見せていなかった、少なくても新しい犠牲者は出ていない。
黄泉川にとって良かったニュースはこの一つだけであった。

舘から続けざまに説明されていく現状は最悪の一言にふさわしいものであった。

まずやはり各支部の無能力者（レベル０）から異能力者（レベル２）の今回の決定への
不満が爆発しており、仮に犯人をつかまえて事件を解決しても組織に大きなしこりを残すだろうとのこと。
そしてさらにもっと悪いニュースがあった。
現状では最有力の”容疑者”止まりであるが、犯人はおそらく”元”風紀委員であるという。
学園都市の人間のデータは、書庫（バンク）と呼ばれる総合データベースによって管理され基本的に生徒や能力など学園都市に関わる情報の全てが登録されている。
風紀委員はその書庫から、権限レベルに応じてであるが情報を引き出すことができ
今回の一連の犯行を行うことができる可能性のある人間を検索して出た結果が『黒皿　洲』。
少女に猥褻な行為をしようとして逮捕された元風紀委員の少年だった。
そして彼を警備員（アンチスキル）に突き出したのが風祭。
そして彼の能力は『光学迷彩』（ステルスボディー）。
書庫によると彼は強能力者（レベル３）らしいので、今回の犯行のように完全に姿を隠すことはできないはずなのだが、本人の努力と環境しだいで能力者の能力は”上がる”のである。
時間はあった、動機もあった、つまりそういうことなのだろうと黄泉川も納得せざるへなかった。

そして容疑者の行方がまったく分からない点。
さらに事件の起きた時間と場所の分布、さらに能力の残滓を読み取る明日真の『遺留思考』（サイコメトリー）を持ってしても何も情報を得られない現状。
そこから導き出される謎の協力者の存在。

どこを取っても”最悪”だった。
舘がため息をつきながら、黄泉川に話しかける。
「お前の言うとおり現状は”最悪”だな。
それでも俺達はできることをやるしかない。
黄泉川、状況が変わるまではなんとかおとなしくしていてくれ。」
剣山ウニ頭の鳴神も舘に同意するように黄泉川を説得にかかる。

二人の認識は一致していた。

ーーこいつをなんとかなだめないと確実に爆発する、絶対に”やらかす”と、確信していたのだ。

「黄泉川、気持ちは分かる、分かるからもう少し待ってくれ。
執行部のバカどもに現状を認識させて俺らで舵取りができるまでそう時間はかからんはずだから。
そうすればみんなが納得できる状況も作れるはずだ。
だから、な、もうちょいだけ頼む！」
ダン！と突然机に手を突いて頭を下げる鳴神。
テーブルに置かれたティーセットが激しく揺れて中身がこぼれるが、だれも何も言わない。

黙って立ち上がった明日真がキッチンへ行き、戻ってきて手にしたフキンで紅茶を拭く。

その無言の空間でそこにいる彼ら、彼女らの考えていることはあるところまでは共通、それ以降はそれぞれまったく違うものだった。

舘は自分の後輩である黄泉川の暴走を最も恐れていた。
彼女自身の安全もだが、黄泉川は風紀委員の中でもその姉御肌で面

倒見のいい性格とあけすけな言動、そしてその規格外の行動力でかなりの人望がある。
彼女が暴走すれば、それに従ってかなりの人間がそれをサポートしようと動き出すはずである。
それはそのまま風紀委員分裂の引き金になりかねない。
それだけは自分が止めなくてならない。

鳴神は単純に今回の件に黄泉川は関わって欲しくなかった。
彼にとって黄泉川愛穂は、大事な友人であり、それ以上に”好きな女の子”だからである、
まったく気づかれてはいないが。
故に彼女の実力は十二分に認めているが、積極的に危険に近づいて欲しくない。
そんな男心を抱えていた。

明日真の考えは黄泉川次第といえる。
黄泉川先輩が動いたら、風紀委員で構成され自分が会長を務める『黄泉川愛穂親衛隊』を動かしてそのサポートに当たることを決めていた。
危険に近づいて欲しくない気持ちもあったが、舘や鳴神といった親しい人々の願いも聞かず動き出した彼女を放っておくほうが何倍も危険だからである。
あとは黄泉川に誉められたい、近づきたい、できるなら愛していただきたい……。
非常時でも百合は百合であった。

そして黄泉川愛穂は本当に困っていた。
彼女の嫌いなことは、考える、必要以上に我慢する、悪い奴をそのまま放っておく、以上である。
考える前に行動、口で言う前に鉄拳制裁、下手な考えでも何もやら

んよりましが、
黄泉川愛穂さんなのである。

ただ舘の懸念も、鳴神の心配（友人としての）も、明日真の信頼も黄泉川には分かっていた。
だからまだ動かない、だが次に何かあったらもう我慢しないと心に決めて口を開いた。

「先輩、鳴神、心配しなくても”まだ”おとなしくしてるじゃん。
んじゃ話も聞けたし、今日はこれで帰るじゃん。
またね～。」
といって支部を後にする黄泉川の最後の一言に、舘は安堵と不安の入り混じったため息を漏らすことしかできなかった。

第三章　Ｃｈａｐｔｅｒ２（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

ご意見ご感想あれば是非ください。

かなりやる気でますので。

できれば連続投稿頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7997s/

とある魔術の禁書目録前史　とある学園都市の見えざる神の手（ゴッドハンド

2011年6月1日22時32分発行